

出会い(27)

いちばんいいもの

奥村 一郎



洗濯機

奈良に薬師寺という名刹がある。そこから出ている『薬師寺』と題する機関誌に、NHKテレビの「百点満点」で活躍中の田畑彦右衛門さんの次のような話が載せられていた。

我が家の旧式電気洗濯機が、この間ついにダウンしてしまった。手しぼり式の古い型とはいっても当時の「暮しの手帖」の推せん品だけあって12年間もがんばってくれたのだが、よる年なみには勝てず、全自動式の新型と交替することになった。「スイッチ一つでしまいまで手がかからなくなった……」と家内が、ホッとしたのは当然として、小学生の息子までが「こんなボロ機械がいままであったのがかっこうわるいや」という顔つきであった。

ところが電気屋さんが新しい機械を持ってきて、古いのを持って帰る時、ふと私が「こいつはずい分お前のおむつを洗ってくれたんだぞ」と言うと、息子の態度が急に変わって何だか持って行ってほしくないような顔になり、最後に洗濯機に向かって「ありがとう」とさえ言ったのである。（『薬師寺』第13号 昭和47・4・1「私たちは生き残れるか」）

とても考えさせられる話である。「もったいない」という言葉がいつのまにか消えてしまった「使い捨て文化」とか、「消費社会」と言われる現代人の心の病が、そこに実によく表れている。戦後日本のめざましい復興は賞されてよいことだが、いつのまにか能率主義と功利主義が日本人の心をむしばんできている。役に立たない人間、成績のあがない人間は、ポンコツの洗濯機のように粗大ゴミとして捨てられてしまう、怖い今の世の中である。

ここで、この子どもは私たちに二つのことを教えてくれる。一つは、大人が作った現代の荒れた世相の第一の犠牲者は子どもにほかならないということ。第二は、父の一言でめぐりに回心する子どものすばらしい単純さ。やはり天国に入るには、こんな幼子のようになることが必要なのだろう。（マタイ18:3 19:14）

中国の古語に、「玩物喪志」という言葉がある。物をもてあそばせば、「志」、すなわち正しい心構えを失うということである。物質の氾濫は、精神の荒廃をもたらすとも言われる。先進国と言われる日本の現代病の一つである。また、「玩物喪物」というおもしろい言葉もある

（『近思錄』）。物をもてあそばせば、心どころか物そのもののさえだめになる、ということである。飽食時代と言われる日本では、食べ過ぎて心が鈍るだけでなく、体までこわしてしまふ。拒食症などというような奇病さえも出てくる。農薬や着色剤で食べられるものささが食べられなくなる食品公害も、その矛盾した一例である。

それに、物はただ理にかなった使い方をするだけではなく、物に心を通わせることが大切である。あの坊やお父さんの一言で思わず目が開かれて、死体のように持ち去られていくポンコツの洗濯機に「ありがとう」と言った。すばらしい子どもの回心の素直さである。目に見えない心の世界が、突如まばゆく見えてきた。過ぎ去った年月と、そのあいだに働いてくれた洗濯機、また、それを動かして働いてくれた母の愛に対する感謝の心でいっぱいになった。少しおおげさに言うと、「歴史の重み」、さらには「神の愛の重み」と言えるものを、ずしんと感じたにちがいない。

目に見える物の中に隠されている、目に見えない世界を見ることこそ、人間の偉大さである。「大切なことは目に見えないんだよ。心で探さないといね」と言ったのは、サン・テグジュペリの「星の王子さま」である。

カミソリの刃

切り抜きのスクラップも見つからないので、言葉どおりに思い出すことはできないが、もう何年も前のことである。確か、『朝日新聞』の朝刊の「声」に寄せられた一文。「カミソリのように」という見出しだったように思う。年齢も記してあったが、とにかく若い理容師さんの、ごく短い投稿で、およそ次のようなことが書かれていた。

「よく“カミソリのように鋭い”とか、“カミソリの刃のようによく切れる”とか言われますが、私たち理容師を職とする者にはあまりうれしい言葉ではありません。ひげそりに使う日本カミソリは、確かによく切れる鋭い刃にはちがいがありません。しかし、理容師にとって大切なことは、カミソリの刃の当て方が柔らかく、そして温かく感じられることです」

とてもよいことを教えられたようで、うれしくなり、今もしばしば思い出される言葉になった。頭や口の鋭い人は、人を傷つけやすい。ほんとうによい頭、よい言葉には、柔らかさと、ぬくもりがある。

少し角度が違うのかも知れないが、これと合わせて思い出される『徒然草』の言葉がある。「よき細工は、少し鈍き刀を使うといふ。妙観

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カトリックのカルメル修道会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書に、『祈り』『断想』『神とあそぶ』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深読法の生いたち』(オリエンズ宗教研究所)、『祈りの心』(海竜社)など多数。

が刀はいたく立たず』。(二百二十九段)

少し鈍ければ、力を入れ、ていねいに彫れるということなのか、あまり鋭い刀は思わす切り込みすぎてしまうということなのかもしれない。あるいは、鋭い刀を柔らかく用いる心の技とでもいうのだろうか。

いちばんいいもの

みんなで いちばん いいものを

さがそう

そして ねうちのないものに

あくせくしない工夫をしよう

八木重吉

かつて、東大宗教学科主任を務めておられた岸本英夫教授は、日本の社会を評して「幸福そうに見える世界」と言った。天皇をめぐるテロ行為、いじめの心理に病む教育の荒廃などと言いながら、まずまず世界での理想的安全地帯になっているのが今日の日本である。地上天国の八分どおりはできあがっている、というのだろうか。科学は進み、宗教も新薬のようにあり余るほどあって、心身のバランスをとっているおもしろい社会でもある。

よいもので満たされている幸福な社会。だが、何かが欠けているような気がする。「幸福そうに見えて」、ほんとうは幸福ではないのかもしれない。というのも、「よいもの」でいっぱい、そのために「いちばんいいもの」が見えなくなっているのでは、と思うこのごろである。

井の中の蛙

「井の中の蛙、大海を知らず」という耳なれたことわざがある。小さな世界に閉じこもってしまっ、広い外の世界を知らない、ということ。管見とか、狭量ということも、それに通ずる言葉である。ところが、最近おもしろいことを聞いた。「井の中の蛙、天を見る」と。まことにみごとに換骨奪胎の背面の論理である。「天」と言えば、「神」にもなる。それは「大海」よりも大きく、さらに広い。たとえ小さな孔のような井戸から見上げるにしても。

このごろの人間は、まだ見ぬ大海にあこがれて、浮かれ出る蛙のようなものになってしまったのかもしれない。特に、長いあいだ島国

に閉じこめられていた日本人の場合はじっと井戸の中にいて、天を見つめる蛙がいなくなった。ひょっとしたら、そんな蛙が、やがて大海原を舞う白鳥に生まれ変わるかもしれないのに。

どの社会、どのような場においても、しよせん、人間の住むところは狭苦しい井戸でしかない。地球狭しとばかり、とびまわっている日本人でありながら、天を見ないで井戸の壁ばかり気にしているからなのだろう。そんなことから井戸の壁はますます狭くなり、押しつぶされそうになって騒ぎまわるのが人間である。

いつか、お菓子の包み紙を開いたら、「一壺天」と書いてあった。心にとらわれがなければ、小さな壺も天のように広くなる、とか説明があった。一つの果てしないもの、それを見つめて生きることこそ、無限に多様な世界に生きる秘訣なのであろう。

「一を抱いて天下の式となる」、中国の古聖、老子の言葉である。

(『老子』第28章)

女子パウロ会『断想』より一部転載

表紙の言葉



モスクにてコーランを読む老人

「...当のモスクは見えている。わたしたちにはどの道を行けばいいのかわからない。...登校途中の制服姿の子どもたちにまじって歩いていく。近代的な世界だ。モスクはきれいで明るくて優雅で、さまざまな色合いの丸天井がいくつもある。朝の光のなかに浮かんでいるように見える。遠くから見ると、まさにモスクがあるべきイメージの通りだ。...」

『アフガニスタンの風』ドリス・レスリング
(晶文社刊)より

写真: フランコ・マン
ペンタール、バキスタン 2001年

- * モスク: 正しくはアラビア語で「マスジド(masjid)」といい、「平伏する場所」を意味する。イスラム教は、偶像崇拝を厳しく禁止しているので、モスクの内部には神の像や祭壇などはなく、ただ礼拝はメッカの方向を向いて行われなければならないため、その方向を示す「ミフラーブ」という龕(がん)が造られ、そのわきには説教壇(ミンバル)とコーランを置く書見台が設けられている。モスクの入口や中庭には、礼拝前に身体を浄めるための水場や、のちには付属建築として外郭に礼拝の時間を告げる数個の尖塔(ミナレット)が建てられた。